

絹と生活の美意識

法政大学 教授 田中 優子

1. 生糸をめぐる年表

紀元前100年頃 中国から生糸と蚕が入るか

3C前半ごろ、朝鮮半島からの渡来人によって織絹技術が伝えられる

8C～ 京都の市には、羅、糸、錦、絹、綾、紗などを扱う業者がいた。

また宮中には織部司と縫部司とがいた。

1229 堺に中国の唐綾織の技術者が来ていて、京都から多くの織手が堺を訪れ、その後、京都で唐綾織が盛んになる。

1407 「長講堂領目六」には、絹、糸、真綿を年貢として納めている地名として、尾張、美濃、遠江、但馬、出羽、加賀、丹波、越後、越前が記載されている。

1402 義満、日本国王となる(1408死去まで)。勘合貿易での輸入品の筆頭は生糸、絹織物だった。

1467 応仁の乱が始まり、織工たちは地方に分散。

1533 神谷寿禎、石見銀山で、朝鮮の灰吹き法による精錬に成功。

1538 日本銀の多量輸出はじまる。

1543 ポルトガル人を含む中国船の種子島漂着事件。この後、ポルトガル人による中国生糸、絹織物の売り込みが盛んとなる。

1550年代 紋織りののできる高機が中国から西陣に導入される。

1567 アモイでは福建人、広東人、ポルトガル人、日本人が取引し、江南産の生糸・絹織物の他、四川・山西の生糸で倭緞(日本様式絹織物)を作って輸出。

1570 マカオにアルマサン(対日生糸貿易組合)ができる。

1576～ 金銀欄、緞子、繻子、辻が花、薩摩がすりなどが、はじまる。

1584 スペイン商船が平戸に来るようになる。生糸、絹織物を持ち込む。

1590～ 生糸購入の目的で、中部ヴェトナム(交趾=広南)への日本船が急増する。

1603 江戸幕府。おくに、北野神社で傾き(かぶき)踊りをはじめ。

1604 糸割符制度できる。ポルトガル船の持ち込む白糸の価格決定の購入は京都、堺、長崎の商人に限られるようになった。ポルトガル船が日本にもたらすものの90%は生糸・絹織物。

1608 遊女歌舞伎全盛。

1620 このころ、ヨーロッパ各国は生糸絹織物の熾烈な日本への販売合戦を展開。

1624 スペイン人の来航禁止。フィリピンと国交断絶。美濃、近江の和糸が京都へ入

るようになる。

- 1636 日本に正式な朝鮮通信使来日（～1811・9回）この年、オランダ船から購入した品物の80、4％が生糸と絹織物で、毛織物が5、5％、綿織物が0、9％、麻布が0、5％、繊維の合計は全体の87、7％だった。
- 1639 日本、ポルトガル人の来航を禁止。一方幕府は対馬に対して、薬種、糸、反物の朝鮮からの調達を依頼。
- 1646 このころの長崎貿易の利益の46％はヴェトナム産生糸（東京および広南）の輸入による。しかしこの後、次第にベンガル生糸がヴェトナム生糸を圧倒。運び手はオランダ東インド会社。
- 1655 糸割符制度廃止。このころから、諸国より和糸が京に入るようになる。
- 1660 このころ、日本はまだおびただしい銀輸出（生糸の原価高騰にもかかわらず輸入量が落ちないため）
- 1698 定められた額以上の中国生糸の買い取りを禁止。
- 1700 京都の庶民人口のうち21％強が西陣関係で生計を立てていた。
- 1702 日本で最初の蚕書、野本道玄『蚕飼養法記』出版。この後、幕末まで約100冊の蚕書が刊行される。
- 1705 （1636と要比較）この年にオランダ船から購入したものは、生糸絹織物が43、3％、毛織物が2、5％、綿織物が20、7％で、繊維は全品目の67、2％だった。
- 1713 幕府は京都の織物屋に和糸を用いるよう命じ、諸国には養蚕製糸を奨励。問屋も遠隔地の農家に仕入れに行くようになる。
- 1715 このころ、京へ入る関東の和糸が近江の和糸に迫る量になる。ただし、下糸であった。
- 1716 このころ西陣で使われた、長崎・対馬を合わせた舶来糸は全体の58％で、残りは和糸だった。

2. 生糸・絹織物の輸入と日本人

絹織物は日本人の美意識に非常に大きな影響を与えた。それは絵画や浮世絵や文学からはっきりと見て取ることができる。江戸時代は、それまで大量に輸入していた絹織物の国産化を果たした時代である。確かに絹織物の輸入は必要でなくなった。しかし生糸は必要とした。そして上級品はあくまでも輸入白糸であったので、江戸時代じゅう、朝鮮経由とオランダ経由で中国やインド（バングラデシュ）の生糸を輸入していたのである。日本が大量の生糸を輸入できたのは、中国が求めている銀の生産量が非常に多く、一時は世界一であったためである。

まず江戸時代に注目してみると、絹織物が江戸時代の文化に大きな影響を与えた最初は「傾き（かぶき）」の成立であったかも知れない。おくに傾きに続いて起こった遊女傾きでは、16歳ばかりの遊女50～60人が伽羅（主にベトナムから輸入されていた香木）を焚きしめた豪華な着物（ほとんどは中国製の絹を使用）の袖や裾をひるがえして踊った。劇場にはエキゾチックな香りがたちこめ、「はつとたちは入みだれ、さゆうにわかれる舞の袖、是や五節の舞姫も、かくやとこそはおもはるれ」——動き入り乱れかと思うと左右に分かれ袖が舞い踊り、平安時代の五節の舞姫もかくや、と思われるようだった、という。さらに遊女たちは床几に腰をかけて三味線を弾いた。鼓や笛にまじって何丁もの三味線の音が響き、「夢のうき世にただくるへ、ととろととろと鳴る雷も、私たちの中を裂けはしない」と歌い踊るのだ。それを見る者たちは「今生は夢のうき世なり、命もおしからじ、財宝もをしからじ」と心狂ったという。遊女傾きの全盛期にはポルトガル船によって大量の中国の生糸・絹織物が運び込まれていただけでなく、朱印船貿易によって日本人貿易商もベトナム生糸を運び込んでいた（年表参照）。

3. 絹織物の美が作った美意識・透ける

中国、ベトナム、バングラデシュの生糸によって日本は絹織物の技術を急速に発達させてゆく。この過程では、平安貴族の絹織物の美意識が大きく作用していたと思われる。たとえば透ける布である。『源氏物語』には透ける絹織物の記述が多く見える。この「透ける」布の美意識は、浮世絵版画の技術が発達した際に、浮世絵の重要な表現方法となった。もちろん国産の薄物布が生産できたことも、大きな理由であった。

「うす物の、直衣（なほし）・単衣を着給へるに、透き給へる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて、涙をおとしつゝ居たり。」（『源氏物語』賢木）「ひめ君は、昼寝し給へる程なり。うすものゝ単衣を着たまひて、臥し給へるさま、暑かはしくはみえず。いと、らうたげに、さゝやかなり。すき給へる肌つきなど、いと美し。」（『源氏物語』常夏）「おほきやかなる童の、濃き柏（あこめ）、紫苑の織物かさねて、赤朽葉（あかくちば）の羅（うすもの）のかざみ、いたう馴れて、廊・渡殿（わたどの）の反橋（そりはし）を渡りてまるる。」（『源氏物語』乙女）「ほたるを、（几帳の）うすきかたびらに、この夕つ方、いと多く包みおきて、ひかりを包みかくし給へりけるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて。にはかに、かく掲焉（けちえむ）に（＝はっきりと）光れるに、浅ましくて、扇をさし隠し給へるかたはらめ、いと、をかしげなり。」（『源氏物語』蛸）

4. 絹織物の美が作った美意識・襲（かさね）とグラデーション

平安貴族の絹織物の美意識にはもうひとつ、「襲（かさね）の色目」がある。季節を布

の重なりで表現するこの方法は、後に文様が発達するとなくなってくる。が、やはり絵画や浮世絵のグラデーションの美しさとして、また着物の取り合わせの妙として、形を変えて発達してゆくのである。グラデーションは『平家物語』の糸おどし（鎧）の世界でも、重要な美の基準であった。『平家物語』では戦いの場面が色彩の豊かさとして表現された。

「(女三宮は) 紅梅(表が紅、裏が紫味をおびた赤の紅梅襲) にやあらん、濃き、薄き、すぎすぎに、あまた重なりたるけぢめ、花やかに、草子のつま(端)のやうに見えて、桜(表が白で、裏が紫あるいは二藍の桜襲)の、織物の細長なるべし。御髪の毛、すそまでけざやかに見ゆるは、糸を縫りかけたるやうに靡きて、裾の房やかにそがれたる、いと美しげにて、七八寸ばかりぞ、余り給へる。」(『源氏物語』若菜上)「(浮舟は) 濃(濃い紫色)き桂に、撫子(表が紅、裏が薄紫のなでしこ襲)とおぼしき細長、若苗色の小桂きたり。……(几帳の) 帷子一重を、(手に) うちかけて、(そのすきまより) 紫苑色の花やかなるに、女郎花(表が黄、裏が黄緑の女郎花襲)の、織物と見ゆる、重なりて、袖口さし出でたり。」(『源氏物語』東屋)「経正、其日は紫の錦の直垂に、萌葱の匂(裾が白く、次第に上に濃くなってゆく「匂」と呼ばれる黄緑色の威)の鎧きて……」(『平家物語』)「いかがしたりけん、伊賀・伊勢両国の官兵、馬いかだおしやぶられ、水におぼれて六百余騎ぞながれける。萌黄・火威・赤威、いろいろの鎧のうきぬしづみぬゆられけるは、神なび山の紅葉ばの、嶺の嵐にさそはれて、龍田河の秋の暮、いせきにかかつてながれもやらぬにことならず」(『平家物語』)

5. 布の贅沢

同じ頃のヨーロッパでは、黄金や宝石などが「宝物」であった。しかし東アジアとくに日本では、技術の粋を集めた絹織物が宝物とみなされた。まだ「わびさび」の時代を迎えていない茶の湯の世界で、その豪華さがきそわれた。『太平記』では佐々木道誉の「大原の茶会」がその様子を描いている。

佐々木道誉は京都の一流の遊芸者たちを集め、京都郊外の大原の小塩山に赴く。まがりくねった道を行き、花や樹木の茂った中に入り、寺の門のところで谷川の流れを渡ると、さらに屈曲した道がめぐり、また川に行き当たって、橋がある。「高欄を金欄にて裹みて、ぎぼうしに金薄を押し、橋板に太唐氈・呉郡の綾・蜀江の錦、色々に布展べたれば」——橋の高欄はすべて、金糸の入った浮き文様のある絹織物で包まれ、ぎぼうしはそれに合わせて、金箔が貼ってある。歩く部分である橋板は、中国のカーペット、やはり中国製の、重厚で光沢のある綾織物、そして、独特の文様と鮮やかな色彩を持った蜀江の錦を敷きつめてある。この橋を渡ってさらに山中を歩けば、やがて釜のにえたぎる音が聞こえ、茶のかんばしい香りがただよってくる。茶をふるまうその場所では、「紫藤の屈曲せる枝毎に高く平江帯を掛けて」。紫の藤の枝ごとに、中国の江蘇省産の、両端に房のある帯がかか

っている。香がたきしめられ、巨木の裾には、真鍮の花瓶のように飾りつけられている。

このような布による豊かさ、富裕は、江戸時代の『日本永代蔵』でも描かれている。輸入布で富を蓄積した越後屋の記述では、さまざまな布が出現する。

「金襴類一人。日野郡内絹類一人。羽二重一人。沙綾類一人。紅類一人。麻袴類一人。毛織類一人。此ごとく手わけをして天鳶兎一寸四方（ピロードの端切れ）。段子毛貫袋になる程（小さな袋に使うぐらいの）。緋縹子鍔印長（槍の先端に付ける槍印に使うぐらいの長さの緋色の縹子）。龍門の袖覆輪（袖のくるみ縫いをする）緞子、かたがたにても物の自由に売渡しぬ……大商人の手本なるべしいろは付の引出しに。唐国和朝の絹布をたたみこみ品々の時代絹。中将姫の手織の蚊屋（一晚のうちに蓮華の糸で曼茶羅を織りあげた中将姫が、蚊帳を縫うのがおかしい）。人丸の明石縮（明石縮は十七世紀からのものなので、人丸がもっているはずがない）。阿弥陀の涎かけ。朝比奈が舞鶴の切。達磨大師の敷蒲団。林和靖が括頭巾。三条小鍛冶が刀袋。何によらずないといふ物なし万有帳めでたし。」

最後には「あり得ない布」に至るこの布の列挙には、ピロードや縹子、緞子などの輸入絹織物だけではなく、国産の布も登場する。越後屋は実際に、国産糸の生産者を抱えながら大きくなってゆくのである。

6. 木綿の時代

江戸時代は国産絹の時代であるとともに、木綿の本格的普及の時代でもある。すでに庶民が絹を知っているからこそ、木綿には質の高さを求めた。18世紀初頭にはオランダ東インド会社からの生糸輸入は50%を切り、そのかわりインド木綿の輸入量が増えている（年表参照）。インド木綿の極細綿糸によって、日本人は絹織物に劣らない上質の木綿を知り、質の高い木綿の生産と、細い糸の生産技術をめざした。絹の状況を理解するには、同時に急速に発達した木綿の状況を知る必要がある。江戸時代では初めて木綿が広く行き渡り、唐棧、古渡り更紗などの高価なものが着物、帯、たばこ入れ、茶入れ袋などに使われた。この輸入木綿の後を追って国産更紗や国産縹木綿が発達した。明治初期には、絹かとみまごうほどの細い糸によるしなやかな木綿の唐棧が存在していた。

明治になって生糸の輸出が盛んになると木綿生産をやめる地域が多くなり、現在ではほとんど作られない。絹は麻のみならず木綿も追い越したのだった。しかし江戸時代の庶民の着物の趣味は木綿で作られたのであり、それが絹に応用されたこともあった。縹木綿は江戸時代では「島木綿」と表記された。そこから「しま」という発音になった。がその後、縹が紬によって織られるようになると、「縹」という文字が使われるようになる。この漢字は「絹織物」という意味を持っていて、当て字である。こうして木綿の風合いに似た紬は単に下級の絹織物とみなされるのではなく、洒落た都会的な布として定着し、日本の絹の美意識の一翼を担ったのである。

紬とともに、もっと注目されてよいものが真綿である。綿入れ、布子と呼ばれる冬の衣料は現在は使われないが、かつては絹織物を使わない人々にとっても必需品であり、また帽子の素材でもあった。まさに庶民の日常用具であり、真綿を作る姿は浮世絵にもよく描かれた。絹は様々な形で、生活のすみずみにとけ込んでいったのである。